

館長のガラストーク

19世紀ボヘミアのウランガラス

妖精の森ガラス美術館 館長 畠山 耕造

鉱物としてのウランは1789年にドイツとチェコの国境付近で発見され、始めからガラスの着色に使われました。ウランガラスの生産が本格化するのは1830年代のボヘミアです。北ボヘミアのリーデル家の工房では、このころウランを用いた緑色と黄色の発色に成功し、一族の女性の名をとってそれぞれ「アンナの緑」「アンナの黄」と名付けました。

1840年以降、ウランガラスはボヘミアの主要なガラス工房で、ピーダーマイヤーと呼ばれる当時のオーストリア＝ハンガリー帝国内で流行していた装飾様式で盛んに生産されました。当館の1階常設展示室にある銀の蓋付の「ミルクピッチャー」はその頃のもので、蓋の裏側に1840年の年号が刻印されています。1850年代にはセレンを添加した赤や茶色の発色が行われ、また、硫黄やカドミウムを加えたオレンジや琥珀色の発色も可能になりました。1860代から90年代にかけて、ボヘミアでのウランガラスの生産がさらに増加します。種類も食器類や酒器類、花瓶、香水瓶、化粧セット、皿、燭台、砂糖壺など多岐にわたっています。その要因として、型押しガラスによる量産の技術が普及したこと、ウランの採掘地に着色剤の工場が建設されウランが安く入手できるようになったこと、そして、木材をガス化して加熱する近代的なゾーメンスの蓄熱式の溶解炉が開発され、きれいなガラス素地が大量に供給できるようになったことが挙げられます。



ミルクピッチャー 1840年



タンブラー 1840年頃



ゴブレット 1840年頃



タンブラー 1840年頃

〈展覧会情報〉きらめきのウランガラス—その源流を尋ねて— 2015年7月15日(水)～2015年12月7日(月)

お問い合わせ先 妖精の森ガラス美術館 電話 (0868) 44-7888

鏡野町郷土館企画展「戦時下の新聞」

平成27年度鏡野町郷土館企画展を開催いたします。今回は戦後70年を記念し、主に太平洋戦争中(昭和16～20)の新聞の中から、当時戦争がどのように報道され、私たちの生活にどのような影響を及ぼしていたのかを紹介します。



期 間：8月15日(土) 9:00～15:30

場 所：鏡野町郷土館(寺和田1466 円通寺境内)

主 催：鏡野町郷土館運営委員会

鏡野町教育委員会・寶寿山円通寺

その他：入館料無料

お問い合わせ先：鏡野町生涯学習課 日下
電話 (0868) 54-7733

かかし募集中

募集期間：9月2日(水)まで



鏡野町合併10周年記念イベント2015鏡野町産業まつりにてかかしコンテストを開催します。出品者には豪華賞品をプレゼント！コンテスト入賞者には賞品もあります！

お問い合わせ先

- かかしコンテストに関すること
(応募先)：JAつやま 西部営農経済センター
電話 (0868) 54-0582
- 産業まつりに関すること
：鏡野町産業観光課
電話 (0868) 54-2987